

6 3 3 1 - 1 0 8  
平成16年10月28日

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成16年度病害虫発生予報第7号について  
平成16年度病害虫発生予報第7号を発表したので送付します。

## 平成16年度病害虫発生予報第7号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。  
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	アブラムシ類	並	2
	ハスモンヨトウ	並	2
	ハモグリバエ類	並	2
冬春キュウリ	べと病	やや少	2
	うどんこ病	やや少	2
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
冬春ピーマン	斑点病	並	3
	うどんこ病	並	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	3
	シルバーリーフコナジラミ		4
冬春トマト	葉かび病	並	4
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)		4
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	4
	ハダニ類	やや少	4
カンキツ類	ミカンハダニ	やや少	5
チャ	カンザワハダニ	やや少	5

冬春キュウリは生育初期～収穫始期、冬春ピーマンは定植直後、冬春トマトは生育初期、冬春イチゴ生育初期、温州みかんは収穫期、茶は秋芽生育期であった。

11月の気象予報

気温は平年並か平年より高く、降水量・日照時間は平年並と予想されています。

(1か月予報 鹿児島地方気象台10/22発表)

## 発生予報の根拠および防除対策

### 施設野菜全般

#### 1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の冬春ピーマン、冬春キュウリ及び冬春イチゴでの発生は平年並である。

[防除上の注意]

2) キュウリやピーマン等多くの作物のウイルス病を媒介するので、有翅虫の飛来防止に努めるとともに、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を定期的に行う。

#### 2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の巡回調査では、冬春キュウリ、冬春ピーマン及び冬春イチゴで発生を確認している。

2) フェロモントラップの誘殺状況は、都城市及び西都市では平年より少ないが、佐土原町(農試内)のように多いところもみられる。

[防除上の注意]

1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若令幼虫期に防除する。

#### 3 ハモグリバエ類 (並)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の冬春トマトでの発生面積率14.3%(平年50.4%)、被害葉率0.3%(平年7.3%)は平年よりやや少である。

2) 10月中旬の冬春キュウリでの発生面積率12.5%(前年36.4%)、寄生葉率0.5%(前年5.5%)は前年より少ない。

3) 10月中旬の電照ギクでの発生面積は25%で、一部に多発生ほ場が見られる。

[防除上の注意]

1) 発生を確認したら早めに防除する。

2) 施設開口部に防虫ネット等を設置して飛来防止に努める。

### 冬春キュウリ

#### 1 ベと病 (やや少)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の巡回調査では発生を確認していない。

[防除上の注意]

1) 湿度が高いときには激発しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。

2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

#### 2 うどんこ病 (やや少)

[予報の根拠]

1) 10月中旬の発生面積率12.5%(平年36.0%)は平年よりやや少、発病葉率0.5%(平年4.5%)は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- 3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

### 3 褐斑病 ( やや多 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の発生面積率25% ( 平年12.3% ) は平年よりやや多、発病葉率4.9% ( 平年1.1% ) は平年より多である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
- 3) 摘除した発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

### 4 ミナミキイロアザミウマ ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の巡回調査では18.2%のほ場で微発生が確認された。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

## 冬春ピーマン

### 1 斑点病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 巡回調査ほ場以外の前作で発生の多かった一部ほ場で、平年に比べ早い発生が見られる。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、除湿に努める。
- 2) 病原菌が侵入した後の防除効果が低いので予防散布を行う。

### 2 うどんこ病 ( 並 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので早期発見に努め、発病を確認したら早めに防除する。

### 3 ミナミキイロアザミウマ ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の発生面積率9.1% ( 平年36.8% )、10花当り寄生虫数0.13頭 ( 平年0.84頭 ) は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度の内に防除を徹底する。

### 3 シルバーリーフコナジラミ ( - )

#### [ 防除上の注意 ]

- 1) 近年、シルバーリーフコナジラミの発生が確認されており、多発するとスス病を併発し生育を妨げ、品質低下の原因ともなるので発生初期に防除する。
- 2) トマト黄化葉巻病ウイルス (TYLCV) を媒介し、ピーマンにも無病徴感染することが確認されていることから、病原ウイルスの密度低下を図るため、地域全体で防除の徹底に取り組む。

### 冬春トマト

#### 1 葉かび病 ( 並 )

##### [ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の巡回調査では1ほ場で発生を確認している。
- 2) 台風等の天候不順により蒸し込まれたほ場では平年より早く発生する場合がある

##### [ 防除上の注意 ]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

#### 2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) ( - )

- 1) 10月中旬の巡回調査では7ほ場中3ほ場で発生が確認されている。
- 2) 黄色粘着トラップ等を設置し、シルバーリーフコナジラミ (媒介虫) の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 3) 生育初期 (育苗期・定植初期) に感染すると被害が激しく、全滅する場合があるので、ハウスには必ず開口部に0.8mm以下の防虫ネットを設置する。できれば、0.4mm以下の目合いが望ましい。
- 4) 施設内外の雑草はシルバーリーフコナジラミの寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 5) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

### 冬春イチゴ

#### 1 うどんこ病 ( やや多 )

##### [ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の発生面積率18.2% ( 平年13.3% ) は平年並、発病葉率2.0% ( 平年2.3% ) は平年よりやや多である。

##### [ 防除上の注意 ]

- 1) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

#### 2 ハダニ類 ( やや少 )

##### [ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の発生面積率9.1% ( 平年25.4% )、寄生株率4.4% ( 平年5. )

3%)は平年よりやや少である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

### カンキツ類

#### 1 ミカンハダニ ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の発生面積率44.4%(平年46.6%)は平年並、寄生葉率4.4%(平年15.9%)は平年より少ない。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%、10葉当たり虫数5~10頭を目安に、増殖初期に防除を行う。
- 2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

### チャ

#### 1 カンザワハダニ ( やや少 )

[ 予報の根拠 ]

- 1) 10月中旬の発生面積率10.5%(平年35.0%)、寄生葉率0.6%(平年5.2%)は平年より少である。

[ 防除上の注意 ]

- 1) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一薬剤・系統の薬剤の連用を避ける。

その他

- 1 防除上の留意点等については、「病害虫・雑草防除等指導指針」(宮崎県・宮崎県植物防疫協会)を参照するが、農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>  
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

#### 3 発生量(程度)の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	い	(やや高	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅
(平年値は過去10年間の平均)				

#### 4 予察情報の種類

病虫害防除所から発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。(従来の防除速報にあたる)

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除所では、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。ぜひご利用ください。

#### 【文書取扱】

病虫害防除所 櫛間

TEL : 0985-73-6670

FAX : 0985-73-7499

E-mail : [ykusima@pref.miyazaki.jp](mailto:ykusima@pref.miyazaki.jp)